

## 151. 守山市杉江遺跡出土の 滑石製品について

### 1. はじめに

杉江遺跡は、湖東平野の西方、湖岸より約1km内陸に入った杉江町と山賀町の間位置している。従来より中世集落跡としてその存在が知られていたが、昭和59年度から実施された新守山川改修工事に伴う事前調査によって、その内容が判明しつつある。本文は、出土した多種多様の遺物の中から、滑石製品について紹介するものである。

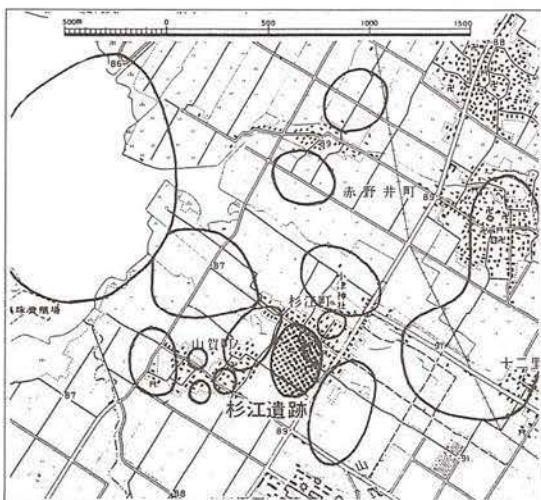
### 2. 遺跡の概要

当遺跡については、既に概要報告が刊行されているが(註1)、遺跡の性格を見る上で、その概要について簡単に触れておくこととする。

当遺跡は、野洲川の旧河道である境川およびその支流によって形成された微高地上に立地し、現在の杉江町とは重複している。調査では、蛇行する旧河道と区画溝を持つ鎌倉時代後半～室町時代前半の集落跡が2面にわたって検出された。

建物群は大きく4群に分かれ、各々区画溝が巡っている。このうちの2群は、自然地形の高低差を利用し、その周囲を巡る堀状遺構によって高台部と低位部とを形成している。建物群の構成は1区画を完全に検出していないため不完全ではあるが、大型の3間×4間程度の掘立柱建物あるいは同程度の礎石建物1棟、2間×3間程度の掘立柱建物数棟、2間×2間の総柱の倉庫1～2棟を基本とし、井戸1～2基、屋敷墓と考えられる土壇1～3基、溝等から成ると想定される。礎石建物に隣接する溝から少量ながら瓦が出土しており、部分的に瓦葺きであったと想定される。上層では区画溝が、埋没等によって下層ほどの明瞭さはなくなっているが、1区画は1辺が約60m前後である。

遺物としては、中世の日常雑器である土師質土器皿類・黒色土器碗類を中心に、瓦質土器の羽釜・鍋・火舎、信楽・常滑等の国産陶磁器類、白磁・青磁・天目等の輸入陶磁器類の土器類を主体とし、鉄鎌、砥石、箸等、多種多様である。中には、鉄釉糸の茶入れ・瓦質土器の風炉・釜等の茶器類も認められる(註2)。



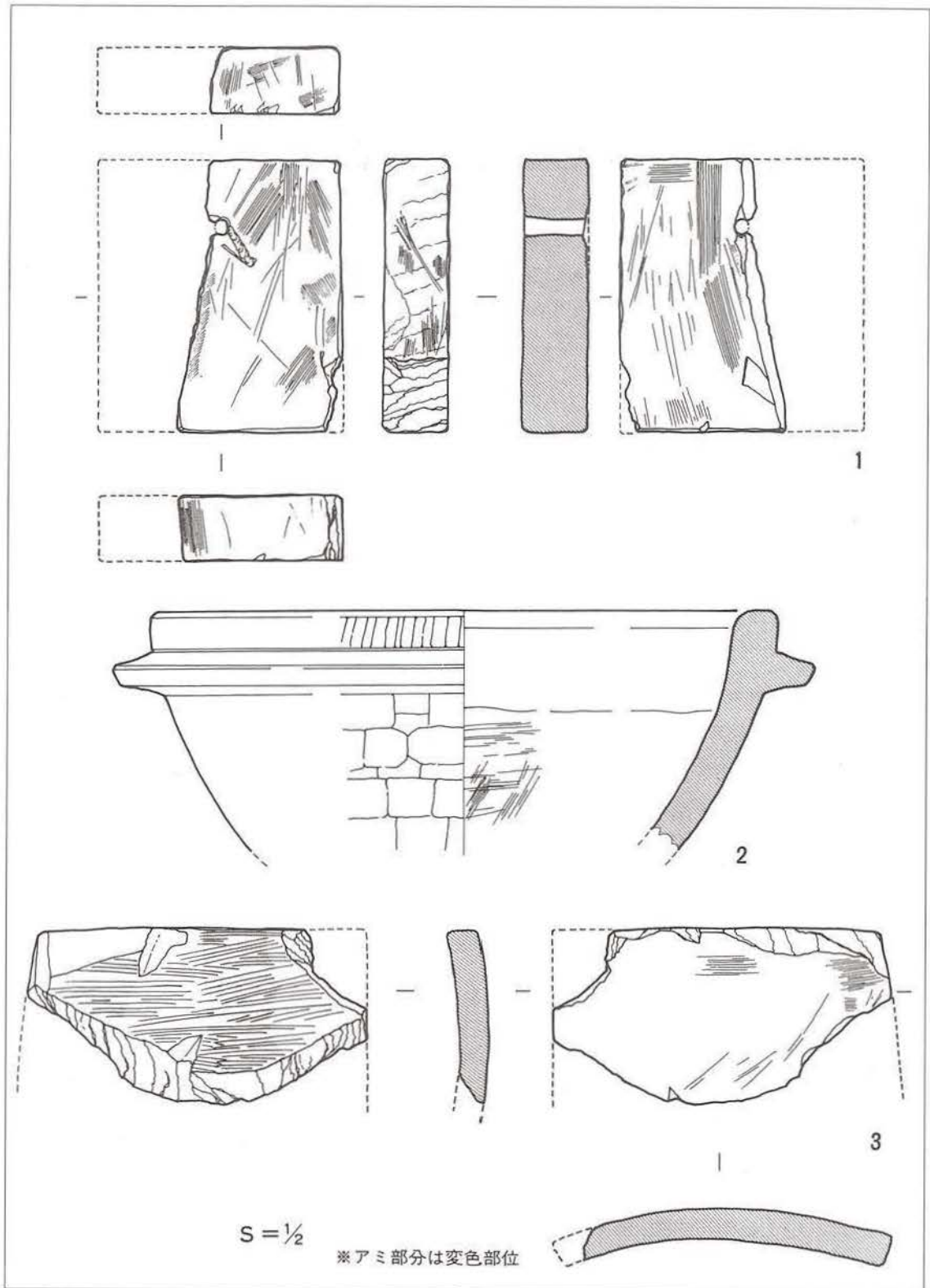
第1図 遺跡位置図

### 3. 滑石製品について

滑石製品は7点出土しており、内接合資料が1点、同一個体と考えられるものが1点ある。以下、各資料について説明を加えることとする

第2図1は、第2層の柱穴内から出土した<sup>滑石</sup>温石である。残存する大きさは、上短辺 4.3cm、下短辺 5cm、長側辺 9cm、厚さ 2.2cmであり、本来は約8cm×9cmの長方形であったと想定される。中央上半には、両面から穿孔された直径5mmの穴が1つある。表・裏面共に縦～斜方向の研磨痕・擦痕が多数認められるが、極めて平滑である。上下短辺も研磨によって平滑に仕上げられている。長側面は、石材の節理を利用した剝離面に若干の研磨を施しているのみである。色調は、光沢のある暗灰色であり、粒子が緻密な良質の石材である。

第2図2の石鍋は、高台部を取り巻く堀状遺構とその上層の自然落ち込み内から出土した接合資料である。口径20cm、残存器高 7.8cm、器壁の厚さが約 1.3cmである。口縁から 1.3cm下がったところに断面台形に削り出された鏝が周っている。鏝の上辺部と下辺部の削り出しの長さはほぼ等しいが、鏝の先端がやや下がり気味である。体部は、底部に向かってやや内彎しながらすばまっている。口縁部外面～鏝は、連続した細かい短冊状の加工痕があり、体部には大まかな加工痕が認



第2図 滑石製品実測図

められる。内面には、縦・横方向の研磨痕が多数認められ、極めて平滑である。口縁端部は丸味を帯びている。鐔の下辺部～体部外面には、ススが厚く付着しており、火に掛けて使用したことが明らかである。色調は、光沢のある暗灰色で、やや粒子の粗い部分もあるが、全体的には良好な石材を用いている。

第2図3は、高台部の包含層から出土したものである。これは、かつて概要報告書の中で石鍋として報告したものであるが(註3)、ここでは再加加工品としてその評価を訂正しておきたい。残存量は、長辺11cm、短辺5.7cmであり、本来は、11cm×6cm以上・厚さ1cmの方形もしくは長方形の板状品になるものと想定される。全体はやや内彎しており、凸面は極めて平滑であるのに対して、凹面には粗い横方向の削痕が著しい。両短側面は、破断面ではなく、面取りされて若干の研磨痕が認められる。上長側面は両短側面と比較すると極めて丁寧に加工・研磨されている。色調は銀灰色であるが、凹面には、縞状に暗灰色に変色している部分がある。これを再加加工品としたのは、側面に二次的な面取り加工が施されていることが、まず第1点として挙げられる。またこれが内彎していることから、恐らく石鍋を転用したと想定され、本来粗い加工痕が残存している外面にあたる凸面が極めて平滑にされていることを第2点として挙げたい。上側面については本来の口縁端である可能性がある。用途については不明であるが、あるいは温石として用いられたとも想定される。

以上の3点以外に図示はし得ないが、3点の小破片がある。1点は、第2図3と同一個体であろう破片、他の2点は石鍋の鐔部分の小片である。後者の2点については、切断面や穿孔痕があり、二次的な加工が施されていたことが窺える資料である。

#### 4. まとめ

以上の滑石製品の中で、土器を伴って遺構内から出土しているものは第2図1と2であるが、これらに若干の検討を加えてまとめにかえたい。

1の温石が出土した柱穴内からは他の土器類は出土していない。この柱穴が存在する第2遺構面はほぼ鎌倉時代後半に相当すると考えているが、かなり遺物に時期幅があるため、時期を限定することはできない状況にある。

2は、堀状遺構およびその上層の堆積層から出土しているわけであるが、上層の堆積層に関してはかなり二次的堆積物の性格を持っているため、堀状遺構内の遺物において時的なことを考えてみたい。堀状遺構には土器溜りがあり、石鍋もその土器群の中から出土している。この土器群は、土師質土器皿類、黒色土器碗、瓦質土器火舎・鍋、信楽摺鉢、白磁皿等から成り、

土師質土器皿類について前後の時期幅が認められるが、ほぼ14世紀後半を中心とするものである。(註4)これに対して石鍋自体について見ると、草戸千軒遺跡出土の石鍋による型式分類に従えば(Ⅲ)ーb類に相当するものであり、草戸I期末に比定されている。(註5)従って、先述の土器群との間に若干の時期差が存在するわけである。このことは、石鍋の耐用年数や、それに対して回転の早い土器類の示す時期が、あくまでも廃棄時期であることを考慮すれば、時期差が現れることはむしろ自然であろうと考える。またこの状況は、いくつかの問題点を示唆しているとも言える。全国的に見て型式的差異が無いと言って良いほど統一化・規格化されたものであるにもかかわらず、当遺跡出土のものが草戸千軒遺跡の編年観との間にずれがあることから明らかである様に、地域によってその所属時期が異なる状況にある。これは、消費地と消費地の対比においてもその差異が存在すると同時に、生産地と消費地における対比においてもしかりである。このことは、石鍋の耐用年数・伝世等の問題を包括しつつ、生産地から消費地、さらには別の消費地への流通の在り方へ問題を深めて行かなければならないことを示唆していると言えよう。また、かつては寺院・僧坊関係遺跡において多く出土すると言われていたが、これらとは別に当遺跡の様に集落内からの出土例も存在するわけで、これらが持つ意義も明かにされねばならないだろう。

また、二次加工痕を持つ小片や再利用品が他遺跡でもかなり見受けられるが、このことは単に有限の滑石原料の有効利用を物語るのみだけではなく、再製品化される段階での、つまり一次製品の消費地における加工技術・流通等の問題をも含んでいるのではないかと考えられるわけで、いずれにしても前述の問題点ともども、原材産地・生産地・消費地の在り方一流通機構の中でのそれぞれの意義付けが、今後これら滑石製品の持つ意味をより深めていくものと期待される。

本文はこれらに対する解答を持ち得ないが、資料化を図ることによって、その進展の一助となれば幸いである。

(小竹森直子)

#### 参考文献

- 註1. 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1986 『新守山川改修工事関連遺跡発掘調査概要一守山市杉江遺跡一』
- 註2. 兼康 保明氏御教示
- 註3. 註1に同じ
- 註4. 小竹森直子 1987 「守山市杉江遺跡出土の中世土器について」『滋賀文化財だより』No.113
- 註5. 木戸 雅寿 1982 「草戸千軒町遺跡出土の石鍋」『草戸千軒』No.112

## 152. 資料紹介

### 北湖採集の銅鏃について

#### 1. はじめに

北湖東部において土砂採集の際に使用されていたサンドポンプ内から5点の銅鏃が発見され、現在保存処理を終えて滋賀県埋蔵文化財センターに保管されている。いずれも残存状態の良い完形品であり、今回はここでそれらを紹介し、資料化を図るものである。

#### 2. 銅鏃について

1は、鏃身長20mm・鏃身幅10mm・茎長15mm・茎径3mm・重量3.36gの有茎平基式のものである。鏃身幅指数(鏃身幅÷鏃身長×100)は50となる。鏃身はゆるやかにふくらみ、断面形は扁平な菱形を呈する。茎部は丸味を持って仕上げられており、断面は隅丸の多面形を成している。

2も有茎平基式のものである。大きさは、鏃身長26mm・鏃身幅11mm・茎長15mm・茎径4mm・重量4.47gである。鏃身幅指数は42でやや細身である。鏃身は、中程以下でやや外彎している。鏃身部断面は扁平な菱形、茎部断面は楕円形を呈している。

3は、わずかながら逆刺が認められる有茎凹基式のものである。大きさは、鏃身長26mm・鏃身幅13mm・茎長15mm・茎径1.5-4mm・重量4.27gを計り、鏃身幅指数は50である。茎端部は尖って扁平になっており、茎部全体が板状となっている。

4は、鏃身に円孔を持つ有茎平基式のものであるが、バリ部分の仕上げによっては凹基式となるものである。鏃身長33mm・鏃身幅11mm・茎長19mm・茎径4mm・重量5.71gで、鏃身幅指数は30となる、やや細身の

柳葉形を呈している。縞をはさんで円孔2個を2列、計4個が配列されている。茎部断面は楕円形を呈する。

5も鏃身に円孔を持つものであるが、明らかに逆刺が認められる有茎凹基式である。大きさは、鏃身長39mm・鏃身幅12mm・茎長15mm・茎径4mm・重量5.60gで鏃身幅指数は31となる。円孔は縞をはさんで4個2列、計8個が穿たれている。逆刺は左右非対象でやや上下にずれている。茎端部には切断面を残している。

#### 3. まとめ

以上の5点の銅鏃について類例を求め、まとめにかえたい。

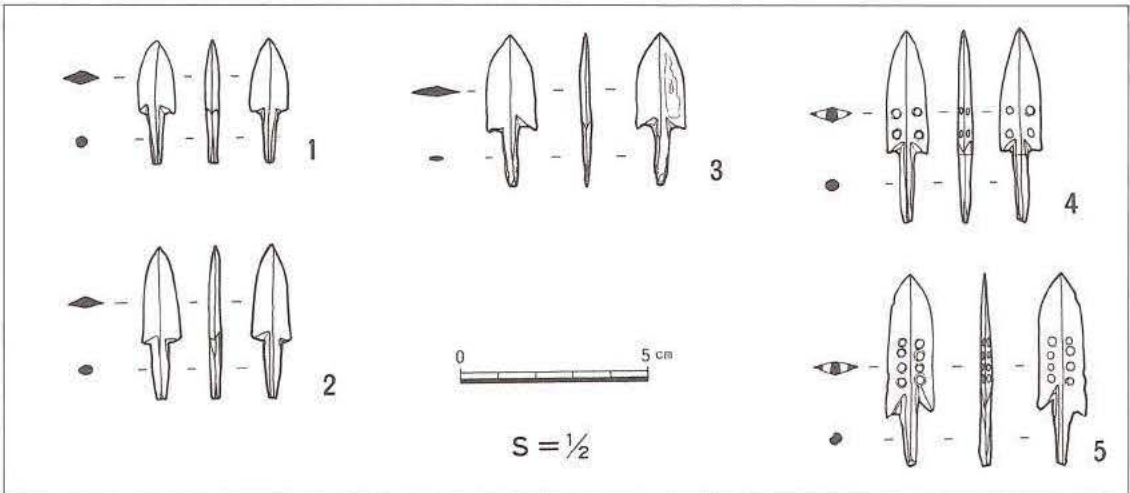
1-3の形態は、有茎平基式・凹基式では通有のものであり、県内においても長浜市大辰巳遺跡・安土町大中ノ湖遺跡・守山市服部遺跡等においてその存在が認められている。

4・5の鏃身に円孔を配するものは、県内では余呉町桜内遺跡(3個×2列)・長浜市鴨田遺跡(3個×2列)・安土町大中ノ湖遺跡(4個×2列+1個)があるが、逆刺の極めて長い鴨田遺跡や、配列の異なる大中ノ湖遺跡例は特異である。4・5は、むしろ岐阜県北一色遺跡・神奈川県大庭城遺跡・奈良県調子遺跡出土のものと同通している。鏃身に穿孔するものは、伊勢湾沿岸を中心として湖北地方・中部・関東にその分布が認められ、今回の資料も時期・性格については不明であるが、湖北地方がこの形態の分布域であることを裏付けるものとなったと言える。

(小竹森直子)

#### 参考文献

1. 田中 勝弘 1981 「弥生時代の銅鏃について」『滋賀考古学論叢』第1集
2. 田中 勝弘 1985 「F.銅鏃」『弥生文化の研究』9



1 第1図 北湖採集銅鏃実測図